

令和 8 年 3 月 1 日

世田谷区立太子堂中学校

校長 武田 尚之 殿

世田谷区立太子堂中学校

学校関係者評価委員会

委員長 友野 清文

令和 7 年度世田谷区立太子堂中学校・学校関係者評価委員会報告書

はじめに 本報告を読まれる方へ

1. コロナ後の学校と教育について

今年度は、2020 年頭からの新型コロナの影響がほとんど感じられなくなり、従来の学校生活に戻ることができた。もちろん新型コロナが消えたわけではなく、また 2025 年秋以降インフルエンザ等の感染症の爆発的拡大も見られたことから、健康・安全に関する日常的な対策は引き続き求められる。

同時に、「コロナ後」を経た学校の姿は、それ以前とは異なるものがある。

一つは、ICT 活用の大幅な進展である。様々な形でタブレットを活用した教育実践が行われている。教師が生徒に向かって一方的に話すのではなく、生徒の活動が中心となる授業が展開されるようになった。

他方で、全国的な傾向として不登校児童生徒の数の増加が続いている。文部科学省の「令和 6 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によれば義務教育段階での不登校児童生徒は約 35.4 万人であり、前年に比べて約 0.8 万人増加した。増加のペースは落ちているが、増加傾向自体は変わらない。

学校教育の意義や役割が根本的に変わっているのではないとしても、子どもにとっての学校や学びのあり方は、「コロナ以前」とは異なるものになっている。これまでの学校教育の蓄積を確認しながら、これからの社会を担う人間の育成のために必要なことを考えていくことが求められているのである。

2. 対話のツールとしての学校評価

さてこれまでも、学校評価の意義について述べてきたが、今年度も改めて指摘しておく。

文部科学省の『学校評価ガイドライン』（平成 28 年改訂版）では学校関係者評価の意義として、「教職員や保護者、地域住民等が学校運営について意見交換し、学校の現状や取組を知り課題意識を共有することにより、相互理解を深めることが重要であり」、「学校・家

庭・地域間のコミュニケーション・ツールとして活用することにより、保護者・地域住民の学校運営への参画を促進し、共通理解に立ち、家庭や地域に支えられる開かれた学校づくりを進めていくことが期待される」と述べられている。また世田谷区も学校評価の目的の一つとして「保護者、地域住民等から理解と参画を得て、学校・家庭・地域の連携協力による学校づくりを進めること」を掲げている。世田谷区立太子堂中学校・学校関係者評価委員会は、これらを踏まえ以下のように報告を行う。報告は学校宛のものであるが、学校の HP に全文が掲載されることから、保護者や地域住民の方にも読んで頂くことを想定している。そのため先ず、報告にあたっての本委員会の基本的立場を述べておきたい。

「誰が子どもを育てるのか」を考えると、社会全体であるという答えがあるとしても、直接的には、教育基本法第 10 条に規定されているように、保護者であると言ってよい。学校教育はある意味で、親の教育の権利と義務の一部を、専門機関としての学校が肩代わりしているのである。そうであれば、保護者（そして地域の人々）も学校教育の当事者である。学校教育は教職員が中心となって行うものであるが、教職員の力だけで行うことができるものではない。

学校関係者評価は、生徒・保護者・地域が学校・教職員を評価し、意見を伝える手段であることは確かであるが、評価には一定の責任が伴うものであって、「学校関係者評価アンケート」は所謂「顧客満足度調査」とは異なるものであるべきであろう。

保護者や地域が、学校教育の「顧客」や「消費者」ではなく、子どもの成長に関わる「当事者」であるとするれば、評価は対話作り・関係作りの第一歩となるものである。文科省が強調するのも「学校評価は対話の手段である」ことである。学校（教職員）・保護者・地域住民・教育行政が各々の立場から関わっていくためのデータの一つが学校評価であって、決して学校を「値踏み」したり「序列化」したりするものではない。

子どもの成長に携わっている人たちが、各々の立場から意見を出し合い、学校をより良いものにしていくことが必要である。選択式のアンケートは、全体のおおよその傾向を把握するための一つの方法に過ぎない。ここから「対話」が始まるのである。

情報発信や情報提供が学校の重要な役割であることは確かである。しかし、それ以前に学校は生徒の教育を行う場である。たとえ「学校からの発信が十分でない」としても、それが「学校の様子を知らない」ことの理由にはならない。

家庭だけで子育てができないのと同様に、学校だけで教育ができるものではない。子ども（生徒）を真ん中にして、各々の関係者が多様に関わっていくことが、これからますます重要になってくるのである。「学校関係者評価」がその一つのツールとして機能することを願うものである。

なお東京都教育委員会の「学校と家庭・地域とのより良好な関係づくりに係る有識者会議」が2025年12月2日に「学校と家庭・地域とのより良好な関係づくりに係るガイドライン（素案）」を公表した。これは2025年4月に施行された「東京都カスタマー・ハラスメント防止条例」を受けたものである。この条例の指針では、「保護者」も「顧客（カスタマー）」とされているが、ガイドライン（素案）で強調されているのは、学校と保護者の「相互理解」「コミュニケーション」「連携・協働」である。ガイドラインは学校の教職員向けであるが、保護者の方にも是非読んで頂き、学校との関係のあり方を改めて考えるきっかけとなることを期待する。

I アンケートの分析報告

本報告書では、令和7年10月～11月に実施された「学校関係者評価アンケート」（生徒・保護者・地域対象）の分析を行う。本年度は項目の設定に変更があった。昨年度までは区が指定する「共通評価項目」と、学校で設ける「学校独自項目」からなっていたが、本年度は、「共通評価項目」は「学ぶことが楽しい」という一項目だけになり、それ以外は学校の判断で設定することになった。ただこの方針が示されたのは、本年度に入ってからであり、十分に検討する余裕がなかったため、ほぼ昨年度までの項目を踏襲した。

回答は、「A とても思う」「B 思う」「C あまり思わない」「D 思わない」「E 分からない」からの選択式であり、本報告書では、A・Bを併せて「肯定的評価」、C・Dを併せて「否定的評価」とする。数値（%）の小数点以下は四捨五入した。

【アンケートの概要】

回収結果は以下の通りであった。

生徒	180名	139名回収	回収率	77.2%	（昨年比	-13.3ポイント）
保護者	180名	138名回収	回収率	76.6%	（昨年比	-16.5ポイント）
地域	39名	21名回収	回収率	53.8%	（昨年比	-5.7ポイント）

回収率については、昨年度に比べて低下している。三年前に回答方式が紙による提出からQRコードからの入力に変更されたことにより回収率が大幅に低下したが、その後学校の取り組みにより、以前の水準まで回復した。ただそれは担任教員が頻繁に電話連絡などを行うことによって実現していたものであった。今年度は強く督促をしなかったため、このような結果になった。これは教員の負担軽減のためやむを得ないことであると言えよう。なお地域については、例年50～60%程度であり、本年度も同水準である。

・生徒アンケート

唯一の共通項目の「学ぶことが楽しい」への肯定的評価は72%（1年生72%、2年生77%、3年生68%）である。この項目は、昨年度はキャリア教育の中に含まれていたが、昨年度は肯定的評価は68%（1年生61%、2年生と3年生はいずれも70%）であった。昨年度より肯定的評価が若干増えているが、3割弱は否定的評価をしている。

学習指導に関しては、多くの項目で肯定的評価が80%を上回っており、全体としての評価は高い。「先生は、課題について、自分で考えたり、友達と考えたりする時間を授業の中で取っている」の肯定的評価が87%（昨年度は93%）「先生は、プリント類やICT等を活用し、分かりやすい授業をしている」の肯定的評価も89%であり、昨年度と同様に非常に高い。また「授業では、考えたり話し合ったり、発表し合ったりする機会がある」の肯定的評価は82%（昨年度は84%）である。「先生は、提出物やテストなどを分かりやすく評価している」への肯定的評価は84%で昨年度の72%からかなり上昇している。ただ3年生は72%となっている。さらに「一人一人に学力が身につく授業が行われている」への肯定的評価は76%（1年生81%、2年生77%、3年生76%）と、学年が上がるほど低い。昨年度は80%（1年生72%、2年生76%、3年生91%）と逆の傾向であった。この結果から、学習指導全体としては、生徒が主体的に参加できる授業が展開されていると言える。評価については、生徒の自己評価も取り入れることを含め、生徒が納得できる評価方法を提示することなどが求められよう。

昨年度も指摘したように、「学習指導」の項目の設問は主に教師の授業運営についてのものであり、それに対する評価が高いのに対して、三分の一の生徒が学ぶことを「楽しい」とは感じていないと言える。ICT活用や授業の工夫が、必ずしも「学ぶ楽しさ」に結びついていないとすれば、その理由は何か。「楽しさ」の内容を含めて、今後の検討が必要である。

生活指導等に関しては「私は、学校での過ごし方やルールについて考えて行動している」（肯定的評価90% 昨年度86%）が昨年度よりさらに高くなっている。「先生は、学校での過ごし方やルールを生徒に考えさせて指導している」の肯定的評価は87%（昨年度は82%）、「私は、基本的な生活習慣（輻輳や言葉遣い、挨拶、礼儀など）が身についていると思うは83%である。

また「学校行事は、楽しい」「学校生活は、楽しい」「部活動は、楽しい」も肯定的評価が各々91%・90%・82%（昨年度は各々91%・90%・87%）となっており、昨年度に続き、学校生活を「楽しい」と感じている生徒が大多数であると言える。ただ部活動への評価が若干下がっている。「学校行事は達成感がある」「学校生活は達成感がある」「部活動は達成感がある」についても、肯定的評価が各々89%・78%・78%で、ほぼ昨年度と同じである。「学校生活は達成感」があるは、昨年度は学年が上がるにつれ上昇したが、本年度は学年による

差は小さい。

キャリア教育については、「自分の進路や将来の仕事について、考える学習・授業がある」への肯定的評価が85%（昨年度は68%）と、大幅に増えた。特に1年生の肯定的評価は、昨年度は37%であったが、本年度は82%と倍以上となった。また「『キャリア・パスポート』を使用し、普段の学習や生活を、振り返り、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりすることができている」の肯定的評価は80%（昨年度は69%）で、やはり1年生で増えている。「キャリア・パスポート」については、3年生の肯定的評価が高いが、学年による大きな差はない。キャリア教育については、各教科・総合的な学習の時間・特別活動の連携を一層図ると同時に、「キャリア・パスポート」が実質的な意味を持つように活用することが必要であろう。

先生（教職員）については、「先生たちは、生徒を丁寧に指導している」への肯定的評価が88%、「先生たちは、相談しやすい」は75%である。後者への否定的評価は各学年15～16%程度（8～9%は「分からない」）であり、先生に相談しにくいと感じる生徒が若干いることが窺える。

「全般について」に含まれる項目では、「私は、家庭で宿題やeラーニングなどで学習をしている」の肯定的評価は63%（昨年度は62%、一昨年度は71%）、「宿題や課題などが適切に出され、家庭学習が充実するように工夫されている」は77%（昨年度は80%）、「家庭学習が定着しつつある」は67%（昨年度は64%）、否定的評価は30%程度であって、アンケート全体の中で否定的評価が比較的多い項目となっている。家庭でのICT活用や家庭学習については、家庭環境や生徒の生活スタイルに依る部分が多いが、昨年度も指摘したように、単に宿題を増やすのではなく、家庭での学びの質・内容がどのようなものであるのがよいのかについては、根本的に考える必要があるのではないかと思われる。

・保護者アンケート

生徒と同様に、全体としては肯定的評価が高くなっている。とりわけ、「学校行事は生徒にとって楽しい」（91% 昨年度は88%）・「本校の学校生活は、子どもにとって楽しい」（77% 同84%）・「部活動は、子どもにとって楽しい」（73% 同76%）など、多くの保護者は生徒が学校生活を楽しんでいると考えている。

また「様々な便りやホームページ・学校配信メールなどで、保護者に情報を提供している」（88%）、「学校公開や保護者会・三者面談を通して、学校での様子を伝えている」（87%）、学校からの情報提供についても高い評価がされている。他方で「保護者に『指導の重点』を伝えている」への肯定的評価は65%（昨年度は66%）、「私は、今年度の学校の指導の重点を理解している」は47%（同47%）である。特に3年生の「分からない」が各々24%と

29%となっている。昨年度も同様の傾向であり、保護者は、学校からの「情報発信」は十分であると考えてはいるが、「指導の重点」という教育方針を十分に理解しているとは思っていないと言えよう。

学習指導については「本校は、子どもが考える事や、課題を解決することを大切にした授業をしている」（肯定的評価 53%）・「本校は、考えたことを話し合ったり、発表し合ったりする機会がある」（同 66%）、「本校は、プリント類や ICT 等を活用し、分かりやすい授業をしている」（同 65%）である。肯定的評価が半数から三分の二程度であるのに対して、いずれも「分からない」が 20%程度である。この傾向は昨年度・一昨年度と同じである。保護者が実際の授業の様子を知る機会は限られているが、学校公開等を利用して、学習指導のあり方に関心を持つことを期待したい。学校としても、情報発信の中に日々の授業の様子をより充実させるなどの工夫が必要である。他方で「生徒一人一人に学力が身につく授業が行われている」については、肯定的評価が 40%、否定的評価が 40%、「分からない」が 20%である。この設問は昨年度まではなかったが、同じ内容の設問に対する生徒の肯定的評価 76%である。否定的評価の背景としては、「学力」についての考え方が、教師・生徒と保護者で異なることや、授業運営上についての懸念などがあると思われる。

生活指導については「本校は、学校での過ごし方やルールについて子どもに考えさせる指導をしている」の肯定的評価が 61%（昨年度は 62%）で、「本校は、教員が指導した学校での過ごし方やルールを子どもが理解している」が 69%（昨年度は 71%）である。2年生での否定的評価が各々 27%と 25%である。ここ数年間生活指導についての評価は下降傾向にある。『生徒指導提要』で言われる「常態的・先行的（プロアクティブ）生徒指導」と「即応的・継続的（リアクティブ）生徒指導」を組み合わせることが重要である。なお不登校の生徒に対しては、個々の状況に応じ、生徒と保護者のニーズを把握しながら、学校全体としての対応が必要である。

キャリア教育については、「生徒は、『キャリア・パスポート』を使用し、普段の学習や生活を、振り返り、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりすることができている」と「本校は、子どもの進路や将来のことについて、考える学習・授業がある」についての肯定的評価は各々 46%と 58%で、否定的評価は各々 31%と 25%、「分からない」が各々 23%と 18%である。学習指導と同様に、キャリア教育についても、学校からの積極的な情報発信と、保護者が関心を持つことの双方が必要であろう。

全般に関わる部分では、「子どもは、家庭で宿題や e ラーニングなどで学習している」「学校は、宿題や課題を適切に設定し、家庭学習が充実するように工夫している」「家庭学習が定着しつつある」は、いずれも肯定的評価が 40%程度である。家庭学習は生徒の生活環境による部分も大きいですが、教師と保護者の連携が最も求められる場面であり、一層の取り組みが

必要である。

これと関わって、家庭と学校との連携（学校公開や、学校行事などへの積極的参加）についても評価は高くない。難しい問題であるが、PTA活動を含めて、保護者が参加しやすい形態を模索することが重要である。

水曜学習教室については、生徒・保護者の意見を踏まえて、さらに充実したものになることが期待される。

・地域アンケート

地域については、多くの項目で肯定的評価が80%を超えており、否定的評価がないものもある。その中で、昨年度と同じように「学校協議会や合同学校協議会が役割を果たしている」「学校運営委員会は活動を周知し、役割を果たしている」は、肯定的評価が61%と54%とやや低く、「分からない」がいずれも38%である。回答数が21と限られているため、ここから一定の傾向を見ることは難しいが、本校は伝統的に地域との結びつきが強い学校である。今後一層「社会に開かれた教育課程」の実現の一環として、地域に開かれた学校になるとともに、地域が学校を支える存在であり続けることを期待したい。

Ⅱ 重点目標について

昨年度末（令和7年3月1日）に出された「令和7年度に向けた改善方策」では、以下の3点の重点目標と、それに関わる「数値による指標」「具現化のための方策」が示されていた。「数値による指標」については「学校関係者評価アンケート、生徒アンケート、各学力調査等を分析し検証を行う」とされているため、本項では「学校関係者評価アンケート」の結果から判断できる範囲で検討する。なお、これまでに触れた項目もあるが、改めて確認しておく。

重点目標1 確かな学力の向上を図る教育の推進

・「わかる授業」の展開

学習の「目的」「聞く」「考える」「作業（調べる、演習、実技等）」を明確にした、メリハリのある「わかる授業」を展開していく。また、授業規律を重視し、生徒に授業を大切にす姿勢を育成し、「生徒自らが学ぶ授業」の実践を目指す。

・家庭学習習慣の確立

学力の定着に効果的な家庭学習の習慣化を進める。家庭学習のきっかけを作る具体的な取組として学習課題の提示を行う。また、各家庭の子どもへの励ましと家庭学習への促し

等の協力体制をお願いする。

・ 数値による指標

- (1) 一人一人に学力が身につく授業が行われている。(生徒：80%以上)
- (2) 先生は自分で考えることや、課題を解決することを大切にした授業をしている。(生徒：85%以上)
- (3) 宿題や課題などが適切に出され、家庭学習が充実するよう工夫されている。(生徒・保護者：80%以上)
- (4) 家庭学習が定着しつつある。(生徒・保護者：80%以上)

アンケートの結果は(1)が76%、(3)が生徒81%、保護者38%、(4)が生徒67%、保護者39%である。(2)については、「先生は、課題について、自分で考えたり、友達と考えたりする時間を授業の中で取っている」が87%である。(2)を除いて目標には達しておらず、特に保護者の評価が低くなっている。

重点目標2 生徒の主体的に取り組む力の育成

・ 生徒が主体として取り組む学校行事の実践

一人一人が何らかの役割を担う形で学校行事を実施する。この取組を単なる「その時だけの行事(点)」で終わらせず、「取組前の指導」「取組」「取組後の振り返り」と一連の指導形態をとり、日々の学校生活の中で成長を確認しながら、次の行事へつないでいくように計画して指導する。

・ 数値による指標

- (1) 学校行事は楽しく、達成感がある。(生徒・保護者：85%以上)
- (2) 部活動は楽しく、達成感がある。(生徒・保護者：85%以上)
- (3) 「大志の学び舎」の活動は、小学校との適切な交流がなされている。
(生徒：80%以上)
- (4) 相手の意見を聴きながら、自分の考えを伝える力が身についている。
(生徒：80%以上)
- (5) 様々な活動に主体的に取り組み、困難なことに直面しても自分で考え、また人の助けを借りて乗り越えていく力を身につけている。(生徒：80%以上)

アンケートの結果は(1)が生徒89%、保護者88%、(2)が生徒78%、保護者70%、(3)が87%、(4)が85%、(5)が87%である。(2)を除いて目標が達成されている。

重点目標 3 自他を大切にすゝ心の育成

・全教職員が生徒一人一人の個性や能力、特性、生活状況などを把握し、丁寧で適切な指導や支援を徹底する。生徒理解のための様々な資料や活動を取り入れ、保護者や学校支援コーディネーター、地域人材とも連携しながら、全ての生徒の自己実現と居場所の確保を目指し、健全な成長と豊かな心の醸成を目指す。

・社会を生き抜く力を身に付ける

発達段階に即し、自らの生き方を考え、主体的で探究的な学習を実践することで、学んだことが将来につながり自らの意思をもって進路を選択できるよう、キャリア・未来デザイン教育の充実を図る。

・数値による指標

(1) 学校生活は楽しい。(生徒：90%以上)

(2) 一人一人を大切にすゝ授業や学校行事が行われている。(生徒：80%以上)

(3) 困ったことがあったら誰かに相談することができる。(生徒：80%以上)

(4) 本校は、生徒一人一人を大切にすゝた教育を行っている。(保護者：80%以上)

アンケートの結果は(1)が90%である。(2)については「一人一人に学力が身につく授業が行われている」が、生徒76%、保護者40%である。(3)と(4)に相当する項目はない。

全体として、学校生活全体や生活指導についての評価は高いが、学習指導の面での課題があると言えよう。

Ⅲ 総括と次年度への提言

以上のように、学校関係者評価アンケートの結果は、いくつかの課題はあるものの、全体としては概ね良好であると言える。本校の学校教育は、地域に根ざした伝統校として、一人一人を大切にすゝて展開されている。次年度に向けて以下の提言を行う。

- 1 学習指導については、授業規律を重視しながら、生徒が主体的な学習を行い、学ぶ楽しさが実感できるよう、取り組みを一層進める。その際個々の教員の良さ・自律性を発揮すると同時に、学校全体としての授業研究に取り組んでいく。
- 2 生活指導については、『生徒指導提要』についての共通理解を持った上で、生徒の自己

指導能力を養う取り組みを進める。また教職員と生徒・保護者との信頼関係を一層深め、生徒が学校生活の主人公となれる生活指導を行う。

- 3 個々の生徒の状況に応じたきめ細かな指導を行うことによって、すべての生徒が安定した自尊感情や自己肯定感が持てるようにする。不登校については、保護者との連携を強め、学校全体として生徒にとって最善のあり方を検討する。
- 4 キャリア教育については、「キャリア・パスポート」が実質的な意味を持つように活用するとともに、教科教育の中にキャリア教育の視点を導入する。
- 5 部活動についてはその意義を踏まえ、区の方針を基に必要な見直しを行う。
- 6 保護者や地域に対して、学校の教育方針や状況についての理解が深まる情報発信を行う。

以上

世田谷区立太子堂中学校・学校関係者評価委員会

委員長	友野	清文
委員	石川	由喜夫
委員	田子	美由紀
委員	米田	幸子
委員	杉山	美以子

